

『キレイナモノ』

洗い熊 Q

9855文字

あらすじ

彼女は小学校当時、ただ綺麗好きな人だと思っていた。だが実際はその事には意味があり、正しいことだと思い知らされる。

熱い鉄板の上で水が気化し、けたたましく弾ける音。水蒸気の煙を立ち込ませながら、油で焦げる皮の匂いが周囲を包む。

素早く逃げる水気を蓋で閉じこめ、じっくりと蒸し上げる。

カウンター越しに僕はそれを茫然と見ていた。

その前を店主は狭い厨房を無駄なく行き来し、餃子の焼き上げを仕上げると、沸き立つ熱湯に浸したテボに麺を投入する。

それほど目新しい景色ではない。よく来るラーメン屋で、よく見ている光景だ。

カウンターに肘を突きながら上の空の僕に店主が言った。

「お疲れなの？」

そう言いながら丼に仕込みする手の動きは止めていない。

「別に。何かやる気が無いだけだよ。色々」と僕は言った。そして視線を厨房から横へとずらす。その先にあるのは小型の液晶テレビ。

何か止めどのない情報番組の音声のない映像が流れている。普段、営業中にこのテレビは点けられていない。暇な時間帯の店主専用。

それが点けられている。そう、いま客は僕だけだ。週末間際の閉店間際。一人というのは珍しいが、来客が少ないのは確かだ。

ちかちかと眼球に侵入してくる液晶の点滅。その信号は神経を伝って脳で映像化されるが、やる気の無い僕の脳はそれを具現化するのを怠っていた。

ぼうっとしている僕を気遣ったのか、少し活気を上乘せした声で店主は告げた。

「はい、ありがとうラーメンお待ち」

その掛け声に思わず僕は苦笑した。

「いつもそんなの言わないじゃん、カッキー」

「他のお客さんには言ってますよ。簡略してるだけ、いつもは」

そう言って店主は段上のカウンターに湯気立つ丼を乗せている。

「僕が初めて来た日以来、言っていないんじゃない？」と言いながら僕は熱くなった丼を両手で持ち、自分の前へと並べた。

「そんな事ないでしょ。暫くは言っていた筈ですよ、半年位は間違いなく」

「そうだったかな。そうかもね」

僕は箸箱から一対を取り持つと、豚骨ベースで白い汁のラーメンを目の前に両手を合わせた。

「いただきます」

「それちゃんとやりますよね。お店に初めて来た時からでしたね、礼儀正しく」

「普通でしょ？ “いただきます”を言うのは。……まあ、当たり前と言っちゃ可笑しいんだよな、こういう事を」

僕は蓮華を白いスープに軽く沈みこませ、添えられたチャーシューを麺下へと潜り込ませる。箸を使って具材の青や紫の海藻と一緒に掬わない様に蓮華一杯のスープを取ると、それを啜った。

うん、美味しい。

いつも食べ慣れた味に、今更にそれを口に出して言うのは気恥ずかしい。黙ってもう一杯スープを啜ると、具材の下に隠れ沈む麺を取り上げた。

「カッキー。ご飯を忘れずにね」と麺を啜る前に僕は言った。

何時もなら、はいよと即答が返ってくる筈だった。だが厨房側からの声は無い。思わず顔を上げ店主を見ると、彼は黙ってじっと横を向いていた。

「カッキー？」

「……この娘、可愛いですよね～」

店主の視線の方向へと向けると、テレビの画面に一人の女性がアップで映されていた。音声は無いが、彼女は何かインタビューを受けている様子は分かった。

「知ってます？ この娘。今年アーチェリーの日本代表に選ばれた人ですよ。真面目そうな感じだけど、可愛いんですよ」

「日本代表……」

「昔からアーチェリーじゃないらしいんですよ。元々は別の競技をやっていて……何でしたっけね……歳もそんな驚くほど若くなくて……えっと幾つだっけ……」

「26歳」

僕はそう言って、箸で上げ止めていた麺を一気に啜った。

「あれ、知ってました？ そうそう26歳。僕より二つ下なんですよ。……あれ？ そうすると同い年なんですよ、彼女と」

店主の言葉に僕は麺を頬張りながら何度か頷いて答えた。喉に詰まりそうになった麺を慌ててスープを飲んで流し込む。

「この娘、名前なんでしたっけ？ あ～忘れちゃったな～。ええっと……」と店主は腕組みしながら空を見上げ考え込んでいた。

——栗山ことみ。略してクリコン。

僕は心中で答えた。そして身にスープが染み、脂としてのダシを出したチャーシューを箸で底から掬い上げて頬張ると苦笑いをした。

彼女とは小学校で同級生だった。この苦笑は一瞬、その当時の事を思い出していたからだ。

小学校に通っていた時、栗山ことみと同じクラスになったのは一回だけだった。五年生の時。

同クラスになる前から彼女の事は知っていた。いや正確には見ていた。
学校での掃除の時間帯。彼女はいつも丁寧に、そして隅々と掃除をしていた。真面目に一生懸命に。

他クラスの時から隣の教室を廊下越しに見れば、その彼女の姿を確認できた。

クリコン——彼女のあだ名。普通に考えれば名前そのままだと思うが、その由来も僕は他クラスの友人を通じて知っていた。

彼女が黒板消しを掃除する時。黒板消しクリーナーで丁寧に粉を吸い取る。固く絞った雑巾で黒板消し表面を吹き上げる。そして洗い直した雑巾で黒板消しクリーナーまでを中まで綺麗に拭き上げてゆく。

黒板消し表面が完全に乾くようにと、教室背後の黒板用のとを交互に入れ替えて乾かすという気の使いよう。

クリーナーコンプリート。家庭用ゲーム全盛期時代の名残を残した命名。略してクリコンだ。

容姿の可愛さも相まってクリコンは浮きだった存在だった。別クラスの僕でもふっとすれ違い様に見てしまう、そんな感じだ。

小学校五年生になって、クリコンと同じクラスになった。

今考えれば、僕が彼女に対して好意があったのは間違いない。でも当時は考えた事もない。

話し掛けようにも恥ずかしさも合います。何より彼女の周囲の空気の違いに近寄りたかった。

着ていた服は高級な物でもない、僕達と変わらないカジュアルな服装。だけど彼女はきっちりと隙なく着こなし、姿勢も良く凜とした雰囲気。上履きのかかとを踏みつぶしてなんて履かない。ランドセルの中も机の中も、教科書にノートに、きちんと整理整頓され入れてあり。体操着もちゃんと綺麗に畳んで袋に仕舞ってある。

同い年とは思えない。2歳ぐらいの年上。それ位に普段のクリコンは落ち着いた雰囲気だ。

そしてクラスメイトになって気付き驚いたのは、彼女の徹底した掃除だった。学校での掃除の時間帯。

箒の履き方、雑巾の掛け方。隙なく拭き残しなく。そして使った用具の手入れさえもクリコンは見逃さない。

窓を拭くにもそうだ。隅々まで拭き上げ、新聞紙で仕上げるなんて当たり前。下サッシの溝を綺麗にすれば、気が収まらないように上サッシの溝も綺麗にする。

そんな多くの場所を一度の時間帯で掃除しきれないのは分かっている彼女は、その週で順を追って場所を変えて掃除。

今日は窓。次の日は黒板。そして次の日は……。前学年でクラスが一緒だった者は気にも止めていなかったが、この学年で一緒になった者には驚く要素だ。クリコンは学年始業式の次日から高水準の掃除をやってのけていた。

それは驚く事でクラス内で浮く要素でもある。案の定、最初の一ヶ月は敬遠された。皆は病的な潔癖症だと感じたろう。

ほんの些細な事だった、クリコンと会話したのは。会話したとは言いがたい感じではあったが。

梅雨時期前に初夏を思わせる様な汗ばむ陽気の日。体育終わりに担任から次の授業で使う教材を運ぶように頼まれていた僕は、体育館で私服に着替えてから教材を取りに行った。

両手で抱えるように教材を持ち、その下の片方の掌で気持ばかり汗で湿っていた体操着を握りながら運ぶ。

教室前の廊下まで来た時だ。廊下の曲がり角でクリコンと鉢合わせした。

それほど驚く状況ではない。でも僕はぱったりとあった瞬間に、思わず握っていた体操着を足下に落としてしまった。

あっと思ったが、教材を持ち腰を落として取るのは難しい。しかし体操着を取り敢えずとはいえ廊下に放置して行くのは気が引ける。そして目の前にいるクリコンに取ってくれとは言えなかった。

他人が着て汗ばんだ服。潔癖症の彼女は触りたくも見たくもない物だろうと。

戸惑っている僕を余所目に、驚いた事にクリコンは躊躇なくしゃがんで廊下に落ちた体操着を拾い上げていた。

そして両手で持って軽く叩くようにすると、くるっと回すように空中で服を丁寧に畳む。そして教材の上に畳んで置くと一言だけ。

「無理しないでね」と優しく言ってくれた。

茫然とした感じで僕は頷いて答えるしかなかった。今思えば、この時にちゃんとした礼を言っていれば仲良くなるのが早くなったかもだが。

——いや言えなかった。人の服を持てるんだとの驚きと、彼女の事を潔癖症だと思いきこんでいた謝罪の念もあったからだ。

その些細な出来事で彼女の印象が一変したのは間違いなかった。

「お前、うるさいんだよ！ いちいちよー！」

教室内に怒鳴り声が響き渡った。どきりと一瞬に空気が張るような大声。怒鳴り声の主はクラスでリーダー格な存在の戸田君だ。喋りも振る舞いも粗暴だが、心底悪い奴ではなかった。目立ちたがり屋。それが相応だ。

「細かいんだよ、お前！ うんなのどうだっていいじゃねえか！」

見れば戸田君が怒鳴っている相手はあのクリコンだ。彼女は怯みもせず、戸田君に毅然とした態度で言い返していた。

「ちゃんと片付けて入れてちょうだい。次に使う人達に迷惑が掛かるでしょ！？」

「まとまってからいいじゃないか！ どうせまた使う時だすんだから！ なんでいちいち綺麗に入れなきゃなんないだよ！」

教室の端から見ていて、どうやら二人は掃除用具入れの中の事で言い合っているのは分かった。どうやら戸田君は、掃除時間終わりに道具を一纏めにして用具入れに放り込んだようだった。

「洗って綺麗にして分けて立て掛けてちょうだい。こんなんじゃ、次に使う人達だけでなく掃除道具達にも悪い事だわ」

昂然と言っていたが言葉に少しだけ幼稚さも感じる言い回しのクリコン。彼女が僕達の同年齢なんだと思えた瞬間だった。

戸田君の背後には舎弟とも言える数人の男子が睨みを利かせる。クリコンの背後にも少しばかり怯えながらも、数人の女子達が彼女を応援するように陣取っていた。

男子達と女子達の対決——二人の言い合いを切っ掛けにその様相を匂わせた。「ちょちょっと！ 二人とも止めなさいね！ ね！？」と慌てて間に割り込んできたのは担任の女性教師だ。泣きそうな声なのは何時もの事だった。

担任の先生は若いが新任という訳ではない。ただ今まで低学年を担当していた。こう少しだけ、大人の考えを真似事する年頃を相手するのは今年からが初めてだったらしい。

ちょっと騒ぎがあると直ぐに半べそな声を出す。頼りがいが無い。皆の始めの印象はそうだ。

「ね？ 二人とも仲良くね？ ちゃんと話し合っただけ？ ね？」

びくついた様子で担任に言われると、情けないと思うと同時に緊張も下がる。殊更に自身では子供とっていない歳の頃は、その“ね？”と言われると少々苛立たしい。

対峙していた二人もそんな先生を溜息交じりに見つめていたようだった。

言い争いの間をその先生に空けられると、クリコンは大きな溜息にも似た深呼吸をしていた。そして何時もの落ち着いた雰囲気醸し出すと、彼女は真剣な眼差し、そして丁寧な言葉遣いで戸田君に向かって言った。

「これはとても大事な事なの。理解して貰わなくても構わない。でもそうする事が大事だって、今はそう思ってくれるだけでいいの。それだけは分かって欲しい」

彼女の親身で真摯な雰囲気に圧倒されるように、戸田君はうっと言葉に詰まって言い返せなかった。分かったとは言わなかったが。

ただその場は、それで対立の様相は収まったのだった。

そんな小競り合いのあった日の放課後——夕焼けがやけに赤く照っていて、それが西日として教室に射し込んで仄かな橙色の世界だった。

みんな帰った後だ。教室には僕と、そしてクリコンだけが残っていた。

彼女は用具入れの中を一人で整理している。多分、あの場で片付け始めたら当て付けの様に感じられる。それを嫌がったんだろう。

僕は——ただ残っていた。いや、気になっていたんだ。

とても大事な事なの。その彼女の言葉。不思議なように思えて、何か伝えきれない彼女の想いがあるようで。

聞かなければならない。あの後、そんな思いが湧き上がったからだった。

この状況。好都合だった。

背後から見ている、クリコンの片付けがある程度目処が付いたと思った時。僕は思いきって彼女に声を掛けた。

「あのさ……栗山さんさ」

その時が初めてだったかも知れない。目の前にして、彼女の名前を口にしたのは。

ふっと少し彼女が振り返り視線を送った。だけど直ぐに彼女は用具入れに視線を戻していた。聞いてはくれている、そう分かったから僕は喋る事を続けた。

「なんでさ……あんなに怒ったのかな？ 確かに戸田君が悪いとは思うけど……そんなに怒る事じゃないかなと、僕は思っちゃうけどな。何が……気に障ったのかな？」

そう言った時、彼女は無反応だった。無視している。そうも感じられた。

——まだ怒っているのかな。男子と喋る事すら嫌なのかな。

そう思って、僕は返事を待たずにランドセルを背負って帰ろうとしていた。

「……悪いんじゃないのよ」とクリコンが唐突に言った。

「え？」

「戸田君が悪いんじゃないの。私が言いたかったのは」

彼女はバタリと用具入れの扉を閉め、くるっと僕の方を振り向いてくれた。

「あれはね……戸田君にとって悪い事だから私は言ったの。悪い流れが起きるから、彼を心配して言ったの」

「戸田君の為？」

「ただ言い返されて、私もムキになって言い返したけど……本当はそう、喧嘩するつもりなんてなかったの」

僅かに彼女が俯いた。恥ずかしげに。橙色の陰影に浮かび上がった彼女のその姿に、思わずドキッとしたのを覚えてる。

「わ、悪い流れ？ それって何なのかな？」と僕はどぎまぎしながら聞き返していた。

「お爺ちゃん」

「へ？」

「私のお爺ちゃんね。ずっと前から古武術をやっているの」

「古武術？ 合気道とか剣道の事？」

「似てるけど、ちょっと違う。戦国時代とか、そんな昔からある武術の事を言うの」

「ふ～ん……」

「だからお爺ちゃんね。礼儀とか作法とかにうるさいの。靴を脱ぎっぱなしにしたりとか、箸の置き方とか、御辞儀の仕方とかも……一つ一つの動作に小言を言うの」

そう言うとクリコンは急に僕に向かって御辞儀をした。

「ど、どうしたの？」

「……正しい御辞儀の仕方はね。掌を太股の上に当て、顔は下を向かずに相手に向けて頭を下げるの」

「そうなんだ……何か迫ってくるような感じだね」と僕は少し身を引ながら言っていた。

「お爺ちゃんはどうしろと言うだけじゃなく、必ずこう付け加えるの。“全ての動作には意味があり、流れがあるんだ”って」

「流れがある……？」

「この御辞儀の仕方はね。刀を直ぐに抜けるようになってるのよ。太股の上に手があるから、脇に差した刀に手が届く。顔を相手に向けるのは、視線を下に向けずに周囲を警戒する為」

彼女は御辞儀をした頭を上げると

今度は両の手を前に翳す。そして掌で三角形を作ってみせるとクリコンは言った。

「正座をしながらの挨拶もそう。左手を床に添え、そして右手を。その時に三角形を作るの、指をちゃんと付けてね。離れていると気が流れないから」

「気？ 気功とか言われるやつ？」

「そう同じだよ。正しいやり方をすれば気がしっかりと流れる。挨拶とか礼法だけじゃない、物に対してもそうなの。正しい使い方をすれば物にも気が流れる。箸にも、靴にも。そして……」

「掃除道具にも」

「うん。丁寧に正しく置けば、次に使う時にしっかりと気が流れる。それでちゃんと掃除すれば環境も整っていく。……掃除した後って気持ちいいでしょ？ あれって気分的だけじゃないんだよ。気が整うから、心身共に本当に気持ちよく感じる」

「……そしたらどうなるのかな。何か効果とかあるの？」

「全てがうまく流れていく、色んな事が。上手く行かなかった事が順調に。これはね、証明されている事なんだよ。だって昔から受け継がれて、今日まで皆が続けている。正しくしている人はちゃんと成功している。……全ての動作には意味があり流れがある。お爺ちゃんが伝えたいのはそういう事なんだと」

圧倒された。肅然と堂々と語る彼女に。雰囲気だけで納得させられた感じだった。

いま考えても、彼女がどうして僕に語ってくれたのか分からない。
でも今まで感じた事のない尊敬の念を抱き。そして初めて彼女と長く語り合ったという思い出。忘れがたい光景となった。

その後だ。僕がクリコンを見習って真似するようになったのは。
真似と言っても彼女の様な完璧な掃除が出来るものではない。出来る事から少しずつ。クリコンは何時もはっきりとした丁寧な挨拶をしている。そこから始めた。
彼女の目を気にしてやっていたのは間違いない。でも実際にそれをすると自分自身、彼女が言ったように気持ち良かった。
それから身の回り事や掃除も。出来る限りに気をつけて、丁寧にやって見せた。
一人が始めて、二人がそうする。不思議なものだ。そうやってゆくと狭い教室に少しずつ広がる。
また一人、一人と。クリコンを見習うように挨拶も掃除もする人が増えていった。
そして何よりクリコンの最初に思い違っていた人柄の良さもある。彼女は決して強制はしない。人を見下さない。どんな人とも対等に接し合う。
他の教室と見比べると差が明かだった。黒板や窓の美しさ。片付いた掃除用具入れ。張られた掲示物の綺麗さも。
クラスの皆がそうするようになって、それがもう当たり前だと思える頃になると環境の変わり様だけではなくなっていた。
クラスの平均成績が上がって常にトップに。
学校行事でも運動会、文化祭などの展示など、僕達のクラスは常に上位にいるようになって。
特に目立ったのは合唱コンクールと学校全体での学級新聞発表会だった。上級生クラスを押さえて上位に食い込んだ時はクラスの皆が歓呼していたもんだ。
小さなトラブルなど個々おきながらも、クラス全体が順調だった。その様になった。今もし一番楽しかった学校生活をしたのは何時かと聞かれたら、間違いなく僕は小学校五年の時だと答えるだろう。
それ位に充実した環境だった。何もかもクリコンのお陰だと——そう思っていたのはクラスで僕ただ一人だけだろうが。
「おい、ちゃんと隅まで拭いとけよな～」
そう掃除の時間に先頭を切って注意を促すのは、あの戸田君だ。学期の終わり頃にはクラスの掃除番長になっていた。
「おはようございま～す」

クラス朝礼での一斉の挨拶後の担任の先生の顔。朝から満面の笑顔になっていた。最初の頃の頼りなげな印象がなく、何時も自信と笑顔を持った先生に。充実したクラスの雰囲気は自然と担任も変えていった。

学期末の頃でも、新年度を迎え六年生になってもそれは続いていくものだと思っていた。うちの学校は六学年への進級の時は基本クラス替えがないからだ。

——ただその変化は唐突に訪れていた。

「それ本当なの？」

側で喋っていた女子の話に、思わず僕は聞き返していた。

「本当みたいよ。だって今日、栗山さん休んでいるでしょ？ 明後日には出発だから。学校にもう来れないみたいだって」

「明後日で終業式じゃん！？ 何で終業式の日に移すの！？」

「もう以前から移すは決まっていた事だったらしいんだけど……理由は分かんないけど、急に日程が早まってしまったって。その日の朝には海外に飛ぶんだと」

「海外って……もう栗山さんは学校には来ないの？」

「多分、無理だろうって先生が言ってた。クラスの皆でお別れ会でもやろうかとも思っていたらしいんだけど栗山さんの方から断ってきたんだって。突然で申し訳ないし、その時間も無いからって」

「そんな……」

話には僕は愕然とした。

それと共に悶々とした感情も込み上げてきた。進級しても同じという思いを裏切られたとの思いも。

それより何かしらの伝え切れてない思いもあり。何より彼女には真っ正面を向いて御礼を言いたかった。

「私は個人的にお見送りに行ける機会があるんだけど……どうする一緒に行く？ それとも何か渡す？ こんな急な事だけど」

その女子の話には僕は大きく頷き返していた。

終業式の前日。やはりその日もクリコンは登校してこなかった。

通常の授業などなく早めに下校。日も傾き掛ける前には生徒などは誰もいない。静かな廊下を渡り、僕は自分たちの教室の扉を静かに開けていた。

幾人ばかりの先生が残っている位の校舎。静かな廊下を渡り、僕は自分たちの教室の扉を静かに開けていた。

僕が来た頃には教室は夕焼けに照らされていた。習字の展示や白い下地の展示物などは橙色に染まっている。

誰もいない橙の教室。初めて彼女と話した時と変わらない世界だった。その色の中に——クリコンは自分の机に座っていた。

音なく入ったつもりが、頭だけ覗きこんでいた僕を気配で気付いたように彼女と視線が合った。

「どうしたの？」と驚いたようにクリコンは言った。

「いや……もしかしたら栗原さんが来てるんじゃないかの思って……そしたら本当にいるからさ」

照れ笑いをする僕。夕焼けになっていて良かったと思った。自分で分かる位に顔が赤くなっていたからだ。

「どうしてそう思ったの？」と不思議そうに彼女は言った。

「ああ……ほら机の中さ。道具とかがそのままだったから。栗原さんだったら自分で片付けに来るんじゃないかと思って、引っ越す前にさ」

最後は自分で片付けたい。その思いで来ると確信を持っていたと明言を避けた。

それを聞いて彼女はしゅんとした。俯き加減に視線を反らした。引っ越すという事に反応してか。

「……御免なさい。本当なら早めに皆に言うべきだったんだけど。終業と同時期だったし……そのまま感じでも良いかなとも思って。黙ったままで」

クリコンらしくもなく、彼女らしいとも思えた。寂しさを直隠すと共に、人に寂しい思いをさせたくないという気遣いとも感じた。

「それは大丈夫。皆分かってくれるよ。それよりもさ……」

「なに？」

俯いて上目遣いに見る橙色に染まった彼女。初めて話した光景と重なる。鼓動が早まり一瞬、口ごもってしまった。

——そのまま告白。そうした方が良かったと今では後悔してる。

でもそれを飲み込み、僕は意を決して隠し持っていた物を差し出していた。

「これをさ、渡そうと思って」

「なに、これ？」

手渡された物を彼女は持ったまま広げて見せた。

それは日本の国旗だ。運動会で使って残したままになっていた。それほど大きくない国旗。

赤い日の丸の白地の部分。クラスメイトの名前と共に彼女宛のメッセージが。クラス全員分が書かれている。

「これって……」と目を丸くしてクリコンは驚いていた。

「いや、本当なら色紙の方が良いんだろうけど。急にだったから。皆に慌てて書いて貰ったんだ」

色様々のフェルトペンで書かれて文字。紫やオレンジなどは分かるが、色合いの悪い茶色で書いている者も。何でその色を選択するかと思ってしまう。

日の丸に沿って書く人。平行に書く人。皆とは逆に書いている人も。

文字の大きさもバラバラ。一番目立つ様にデカイ字で書いているのは戸田君。ああ彼らしいとは思うが。

日の丸の白地は秩序のない言葉の雑然で満たされていた。

「皆、もうちょっと考えて書いてくれれば良かったんだけど。何か汚く見えちゃうよね、これ」と苦笑交じりに僕は言った。

「……綺麗だよ」

「え？」

「そんなことない。とても綺麗だよ、これ」

「そうかな……」

「だってこれには流れているもの。皆の思いが。水のように。血のように。流れているから、だから綺麗だよ」

その彼女の言葉は涙声混じりに聞こえた。国旗を抱きしめる様に持つ後も。

でも橙色に照らされている彼女の表情は、何時もの凜としたクリコンに変わりはない。

僕は手に持った井内のスープを飲み干した。身体に悪いと言われようが残す事は性に合わない。

空になった井をカウンターに置くと僕は手を合わす。

「ご馳走までした」

そして器をカウンター上段へと逃がしてやると、近場にある台布巾で目の前のカウンターを拭き上げた。

「いつもありがとう御座います。そんなの僕がやるのに」と店主が笑いながら言った。

「良いんだよ。ここは僕の指定席だからまた使うし。他の客さんだって使う」

台を拭き上げて一息付いた僕は、携帯電話を取りだしていた。テレビを見るとクリコンはもう写ってはいない。

「——もう知ってるかな？」

クリコン、日本代表に選ばれたらしいんだ。

小学校同級生組でさ、また昔みたいに寄せ書きを贈らないか？

クリコンの連絡先は僕が知ってるから。ちゃんと渡せる」

そう僕はメールを打って戸田君へと送った。
こう言う時、戸田君は本当に頼りになる。
また彼女に贈って上げよう。昔と同じ様に綺麗なものを。